



教職大学院

Newsletter No.

15

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

09.07.30

教職大学院に期待するもの

白梅学園大学教授 無藤 隆
(福井大学経営協議会委員)

教職の養成はどうあるべきか。このことの議論は尽きません。整理してみると、一方で、実習を増やすべきであり、実践に即したスキルを教えていくべきであるという議論があります。それに対して、むしろ実践を見直していく力(リフレクション)を育てるべきであり、そのためにも基礎となる教育学の知見を大事にしたいという論もあります。また、大学での養成課程を充実させていくことが提案されるとともに、現職の研修の拡充が進められつつもあります。

そのことは、教職の専門性がいかなるものなのかということのイメージの違いが元にあると言えます。技術的専門職か、反省的实践者かという有名な区別もそのことの解明のための分け方です。とはいえ、その二分法も単純にとらえると無理があります。スキルが単独であるはずもなく、またスキルが不変的というわけでもありません。その時々々の事情や要請に応じて変えて行かざるを得ないものです。だとしたら、その状況に応じていくために、分析を行い、発展できる力が求められ、それは単なるスキルには止まりません。逆に、振り返り、コメントできるとしても、実際の行動において生徒を相手に対応できてこそ意味があるのが実践の仕事です。スキルがないなら、単なる評論家です。

また学校教育は公的なものであり、学習指導要領その他の制約の下にあります。それは実践者を縛るでしょうが、同時に実践の専門性を支えるものでもあります。そういったものを承知して、実践に生かすという仕事はいわば制度的実践とも言えるものとなります。さらに学校は組織として機能するので、その同僚と協働し、また学校という場での様々な特質を利用して実践を進める姿勢が大事に

なります。

またたくさんの実践事例が先行してあり、また日々案出されており、それを理論づけるミニ理論が多々流通しています。学界でも実践の世界でもそれは同様に、権威あるものがいくつも並立しつつ、それに反する考えや見方が生まれていくものなのです。教育実践は確立して安定し、がっしりしたものというより、そういった小さな革新に絶えず晒され、動いていくものでもあります。

そういった事情はどこまで学生や初心の教師に伝えられるのでしょうか。かなり困難なことに違いありません。だとすると、学びつつ実践し、実践しつつ学ぶあり方を身につけるということを教職養成の基本に据えるべきことは明らかです。しかも、その教育にあっては、スキルと理念、個別の教師の工夫と同僚性、授業と授業を囲む場、学習指導要領による制度的制約とその生かし方、等の多様な関係を理解してもらわねばならないのです。その関係はそれほど自動的に調和するものではないはずですが、根本的に対立し矛盾するものではないと思うのですが、しかし、種々の軋轢が起こります。

教職大学院もその葛藤を免れるはずありません。むしろ寝た子を起こすという意味で、あえて、葛藤を引き受けて、多様な関係を生き抜く覚悟をしたところで成り立つとさえ言えるかも知れません。その先端を走る福井大学の教職大学院に期待するところは極めて大きいのです。上記の困難課題に真正面から取り組むことを自覚的に選んだからです。指導に当たる教授の方々と学生の皆さんの健闘を祈る次第です。きっとそこから日本有数の成果が生まれ出てくるのだと予期し、期待しているのです。

ラウンドテーブルを振り返って

去る6月27日(土)28日(日)に専門職として学び合うコミュニティ、実践研究福井ラウンドテーブル2009が本学で開かれ、全国からの多数の教員や大学院生が集いました。今回のセッションの一つに、5つの領域について語り合う場があり、その中に本学教職大学院2年生の企画も設けられました。

教員に求められる知的基礎体力

群馬大学大学院教育学研究科教授 佐藤 浩一

このたび福井大学教職大学院が企画したラウンドテーブルに参加し、報告の機会を与えて頂いたことに感謝する。当日語り(騙り)尽くせなかったことを、この場を借りて述べさせて頂きたい。

学校の先生方はどうしても毎日の授業や学級経営に精一杯で、ともすれば今日の問題解決や明日の授業に役立つ情報ばかりを求める傾向が強い。そうした面では、日々の経験からある程度熟達化することが予想出来る。しかし教員としてさらに一皮むけるには、あえて今日明日の仕事に直結しないような「知的基礎体力」をつけることを心がけて頂きたい。筆者が期待する5つの基礎体力を述べよう。

第一は、情報リテラシーやリサーチ・リテラシーと呼ばれる力である。熱心なのは良いことだが、これがないと、正しい情報ばかりか間違った情報までも鵜呑みにして、授業に持ち込むことになりかねない。

第二は、問題解決力である。教職大学院に入学された先生方のテーマは「子どもの自主性を生かした云々」「どの子も伸びる云々」という大風呂敷がほとんどで、これでは風呂敷の畳みようがない。大問題は中問題に、中問題は小問題にばらすことで、問題の構造がはっきりするし、解決に向かっていくかという見極めもできる。

第三は協同する力である。「三人寄れば文殊の知恵」という諺通りにことが進むことは、ほとんど無い。われわれ

愚かな人間の協同は、文殊の知恵どころか、 $[1+1=1]$ という状態を作り上げてしまう。

第四は、言葉を使う力である。子どもが大人の言葉を真似るのはほほえましいが、初心者が熟達者のまねをして業界用語を振り回すのは些か見苦しい。自分のなかで十分咀嚼して消化出来た言葉で語って欲しい。そうでなければ、お仕着せの衣装で歩く王様になってしまう。この力は、自己をモニタリングするメタ認知の力とも重なる。

第五は、過去の成果にまで目を向ける力である。例えば全国学力・学習状況調査で「知識の活用(活用力)」が問題になると、その名を冠した特集記事や書籍が乱発される。しかしこれは心理学では「転移」と呼ばれ、古くから検討されてきた問題である。また事実、多くの教員は、ある時間の学習が他の単元や教科、さらには日常生活で生かされることを願い、工夫を凝らしてきたのではないか。

こうして、専門職としての教員に筆者が期待する力を並べてみると、大学の教養教育で身につける力、あるいはOECDのキーコンピテンシーとも重なるようだ。それだけ、必要性が普遍的に指摘されつつ、同時に、達成困難な力なのかもしれない。

(参考)

米国学術研究推進会議 (2002) 授業を変える 北大路書房

亀田達也 (1997) 合議の知を求めて 共立出版

佐藤浩一・古屋健 (2009) 学校教員のリサーチ・リテラシー 日本教育大学協会研究年報第27集 Pp.81-92.

渡辺健介 (2007) 世界一やさしい問題解決の授業 ダイアモンド社

本物の体験が生徒を変える ～スクールリーダーに求められる力～

福井県越前市花筐小学校教頭 佐竹 了

「何のために勉強するの・・・」武生第二中学校では、低下している主体的な学びの根幹ともいえる自己有用感・自尊感情を、本物の体験を通して育てています。

今回、第3領域で「特別なニーズのある人を支える学校と地域、専門職間の連携」のテーマの下、二つの取り組みを紹介させていただきました。

菊人形d e デート

中学生とお年寄りが菊人形会場で一日を過ごす、3年生157名の福祉学習のまとめです。車椅子を押したり、手をつないだりして会場を案内し、お昼を一緒に食べました。いつもと違う柔らかな表情に施設のスタッフが驚かれたり、別れ際に涙するお年寄りと手を握りながら生徒も涙ぐむ姿が見られたりしました。自分たちの関わりがこんなにも喜んでもらえる・・・やりがいを実感した一日でした。

読み聞かせ訪問

保育園児の反応が大きくなるにつれて、読み方も感情が入り大きくなっていったり、大きなカブに扮した中学生を園児が声を合わせて引っこ抜いたりした特別支援学級生徒による保育園への読み聞かせ訪問です。活動は市中央図書館へ出向いての絵本選びからはじめ、「どうしたら園児に喜んでもらえるか・・・」と練習と小道具作りに精を出して望みました。喜んでもらえることを実感した生徒たちは、二回目からは見通しをもって、より積極的に活動に取り組んでいます。

本物の体験が生徒を変える

二つの学習の共通点は、擬似じゃない本物であること。学校の中だけでは完結しない取り組みであること。そして、地域や色々な専門機関と連携しなければ出来ない活動であることです。特別なニーズのある人はもとより、子供からお年寄りまで全ての人が、地域の中で地域の人たちと関わりながら生きていかなければなりません。社会的な存在に育てなければならない学校教育において、中学生は、自分の力が地域の誰かの役に立つという達成感の中で、自尊感情や自己有用感が育まれるものと考えます。

地域や諸機関との連携を求めているのは学校だけではありません。学校も地域の一員として、学校外との連携をコーディネートする力がスクールリーダーには求められているのではないのでしょうか。そのような意味において、今回のラウンドテーブルで色々な立場からの意見を聞いたのは有意義でしたし、今後様々な分野の参会者が増えることで更に魅力あるセッションになっていくことと思います。

現在越前市花筐小学校勤務ですが、発表内容は3月までの勤務校武生第二中学校の取り組みです。

ラウンドテーブルに参加させていただいて 領域「特別なニーズのある人を支える学校と地域、専門職間の連携」

福井県健康福祉部子ども家庭課家庭福祉グループ主任 光真坊 浩史

私は福井大学教育学部を卒業し、平成4年に福祉専門職として県庁に就職し、これまで児童相談所や障害者更生相談所で、特別なニーズのある人の支援にかかわってきました。現在は、子ども家庭課で、児童虐待などの児童福祉施策の企画・推進に関する仕事をしています。“研究”から遠ざかっていた私に声をかけてくださり、感謝しています。

領域毎のセッションでは、越前市武生第二中学校の全国

的にも先進的な取り組みである、地域高齢者や乳幼児とのふれあい、特別支援学級生徒の保育所への出前交流等の実践研究の報告をお聞きました。地域の人々との交流は、学校内では学べないものです。子ども一人ひとりの目の輝き、可能性に触れることができ、とても感動しました。プレゼンもさすがでした。

私は今、児童虐待に関する仕事をしています。児童虐待

は年々増え、福井県でも2.5日に1件の割合で発生しています。虐待は、親の養育力や地域の支え合い力の低下が要因の1つにあげられています。人間関係が希薄化する中、赤ちゃんや高齢者などの異世代交流は、虐待の防止にも有効であるといわれており、期待されている実践の1つです。

教育分野では、子どもにとっての有益性は論ぜられることは多いと思います。しかし、異世代交流は、赤ちゃんにとっても、その親にとっても、高齢者の方々にも有益なはずです。このような実践は、子どもの可能性や輝きを引き出すことだけでなく、地域に住む人々の幸せにも貢献し、社会問題化している課題の解決にもつながるはずです。この実践研究が、多面的に分析されることを期待します。

精神障害のある方の社会参加支援や美浜中学校の個を大切にす人権教育実践研究報告もお聞きしました。自身

の実践を振り返り、次のステップアップにつなげていく姿には尊敬を覚えます。一人の子どもについて、関係する職員すべてが議論する。コミュニケーションの深さが、子どもを見る目の深さにつながり、施設(学校)全体の文化として根付いている様子がわかりました。

今回、私のいる福祉とは異なる分野の専門職の方々(教員等)と円卓を囲み、議論させていただきました。実践研究には、①緻密な計画、②効果の検証、③地域への還元、④多分野の人々とコミュニケーションが大切であると感じました。常に“研究”という観点で実践されている教育分野の報告は、“研究”という視点の弱い福祉分野の私にとっては、新鮮であり、刺激になりました。専門職として大切な視点を再確認することができたと思います。ありがとうございました。

ラウンドテーブルに参加して

甲南女子大学看護リハビリテーション学部看護学科 前川 幸子

医療・看護のセッションでは、看護基礎教育における教育実践について話し合われました。最初の発表者藤井千代美さんからは、授業「小児看護学(全10回)」で行ったグループワークを中心とした探求型学習が紹介されました。この学習の特徴は、第一に、グループワークで生じる学習内容の偏りをカバーする“Cross Over Round Table”という時間を設けていること。これは各グループの学びを共有するために、新たにグループ編成することでメンバーそれぞれがグループの代表者としてワークに臨むというものです。第二に、後続する関連科目も同じメンバー構成にすることで、コミュニティとしての発展を期待すること。第三に、グループ学習を保障する教師とのノート交換など、密なる往来があることでした。写真で垣間見た学生の姿は、実に生き生きとしており「グループワークは時間がかかって大変」だが、「学ぶ充実感がある」ことを映し出していました。次の発表者清水継子さんからは、ご自身の臨床実習指導の取り組みが紹介されました。対象者にとってのより良い生活を目指す看護では、相互関係を構築する力、いわゆるコミュニケーション能力を重視します。今回清水さんは、患者の思いになかなか近づけない、その人の気持ち

に寄り添うことが難しい学生と出会いました。清水さんはその学生にさまざまな形で指導を試みるのですが、学生が患者に向き合っているようには見えません。その問いを糸口に私たちが話し合ったことは、これまで通常としてきた「病に苦しむ人を見たら、何とかしたい」「その人の辛さを理解したい」という思いは、教師から見た捉え方であり、学生にその見方を押し付けてはいないだろうか、また「苦しみ」とは、専門的知識があってこそ分かち合えるのかもしれない、ということでした。当初清水さんが学生に抱いていた「患者の視点に立った看護」の志向は、学生の視点に立つことでしか教育が始まらないこととして、私たち教師への問いかけとして舞い戻ってきたのでした。

お二人の共通点は、学生の状況に応じて教育方法を微調整し、実践している姿にありました。学生が何に関心を寄せているのか、教師がその都度の『今』に浸透しつつ振り返ることがその場に応接する方法へと導いてくれるのでしょう。他方でそれは、日常と化した図と地の反転に繋がります。こうした営みが、教師の実践力を育ててくれる。そんなことを改めて実感したひと時でした。

院生企画に参加して

福井大学教職大学院教職専門性開発コース 2年 高山 星奈

今回初めて「若い世代で語る～走り出した実践をもとにした語り合いから学ぶ～」というテーマのもと、教員を目指す様々な立場の若い世代で集まる時間を設けました。他の同年代の人たちがどのような学びをしているのかを知り、自分の位置や学びをもう一度確認したいと考えたからです。

私のグループでは、講師、他大学の教職大学院生（東京学芸大学 M1）、学校教育専攻の院生というように、実に様々な立場の人が集まりました。同年代での語り合いは、先生方との語り合いのようにベクトルが前に向いていくのではなく、「こんな悩みがあって…」「わかります、わかります。私も…」「でもどうしたらいいんだろう…」と、愚痴の言い合い、または堂々巡りになりかねません。しかし、ぐるぐる回る中で、自分の現在の位置を嫌でも見つめ直さなければならなくなりました。立場は違うのに、なぜか悩むところや立ち止まるところが似ているからです。または自分が最近一度は通った道、通るであろう道だからです。

例えば、同じグループの講師の方の話を聞いて、「(やっていることは私と) 同じだ…」と感じました。何が同じだ

と感じたのかと言えば、実践をして、その後じっくり自分自身や実践と向き合うというサイクル、子どもとの距離のとり方に悩んだことが同じだったのです。その講師の方は教科指導をしておられます。授業前、毎回授業展開をノートに書き、特に主要発問をいかに自分の言葉で子どもたちに伝えるかを考えておられました。ノートに残すことで、次の授業へいかす材料になっていました。子どもとの距離の取り方も、どこまで踏み込んでいいものか悩んだことを語っていただきました。日々忙しい中で、自分や自分の実践としっかり向き合いながら頑張っておられる姿から、私とは違うこんな学び方もあるのだなと感じたし、大きな刺激になりました。

今回若い世代で語り合うことで、私と同じように考えながら実践を行っておられる姿にたくさん触れることができました。似たような悩みを、様々な立場の方からの視点で聞くことができました。同じ教師を目指す仲間だからこそ、共感できること、刺激し合えることが多く、今後一緒に高め合っていけるコミュニティになるのではないかと感じました。



院 生 紹 介

齊川 清一 さいかわ せいいち

(福井県立藤島高等学校)

平成21年度福井大学教職大学院に入学した齊川清一です。現在、福井県立藤島高等学校に勤務しております。今年で7年目の勤務となります。担当教科は理科、専門は地学ですが、現任校では地学のほかに化学と理科総合Aを担当しております。現在の高等学校では地学が開講されている学校はとて少なく、常に専門以外の科目を担当してきました。7年前、藤島高校に勤務することになったとき、初めて地学を本格的に指導することになりました。

私は、これまで美方養護学校、勝山高等学校、丸岡高等学校城東分校そして県職員として福井県児童科学館で勤務してきました。この間、教員生活におけるいくつかの転機がありました。まず、新採用の学校が特別支援学校であったことです。ここで児童・生徒との関わりの基本を学ばせてもらいました。少人数の子どもたちを注意深く、少しの変化を見逃さない教師としての目が必要であることを感じながら過ごした時期であったと思います。その後、高等学校での勤務となり教科指導・クラス運営や部活動指導などで高等学校での教育を経験しました。また、2つ目の転機は定時制の勤務となった時で、心に悩みを持つ生徒や学習意欲に欠ける生徒に接することで、学習指導や生徒指導の困難さを強く知らされました。さらに、3つ目の転機は、福井県児童科学館での行政としての勤務を経験した時であります。ここでの勤務は、中間管理職として若手の職員を指示し引っ張っていく立場で、学校とは全く異なる業務で戸惑う場面が幾度もありました。しかし、この3年間

で組織を動かすことを経験できたこと、そして学校で接する教員以外の大学講師や社会人に知り合う

ことができ、新たなネットワークを作ることができたことからとても貴重な勤務体験となったと思っています。その後、現在の勤務校で、平成16年度から文部科学省の研究指定事業であるスーパーサイエンスハイスクール(S S H)を中心に携わり、その担当も今年で6年目となります。その間、生徒ともにこれまでの教員生活では経験してこなかった貴重な時間を過ごすことができました。現在の日本の最先端の科学技術に触れたり、著名な研究者のお話を聞いたりまた海外へ研修に行ったりと多岐にわたる経験をすることができ、生徒以上に自分自身の学びの機会を得ることとなり、忙しく感じながらも大変充実した毎日でした。

この春から福井大学教職大学院で学ぶこととなり、小学校や中学校、特別支援学校と異なる校種で勤務する先生方とともに教育に関わるいろいろな話題について学ぶことになり、今後の教員生活における意味の深い一年になると考えております。この教職大学院に参加してわずかな時間しか過ごしていませんが、現場の高校とは異なり、明るく話し合いがしやすい雰囲気です。とても心穏やかな時間を過ごすことできる空間と観じています。



齋藤 雅宏 さいとう まさひろ

(福井市至民中学校)

本年度、教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました、齋藤雅宏です。至民中学校に勤務をして7年目になります。私は新採用から17年間全て中学校勤務で、技術科を専門教科としての授業をしてきました。福井市内の三校兼務3年、光陽中7年、そして至民中と勤務する間、授業が教員の本柱と理解しているものの、生徒指導や部活動指導に力を入れ、部活で結果を残し、生徒指導を円滑に

できクラス運営ができることが良い教員であると思ってきました。学校生活をしていく中での良い生徒(従順に言う事だけを聞く生徒)を育て、卒業時に進学をさせ



ることが生徒たちにとって幸せなことだと勘違いをしていました。

これから先21世紀を生きていく生徒たちは、いわれたことややらされることをできる人では通用しなく、創造的で人との関わりが的確にできる人が必要になってきます。そのようなことに気付かせてくれたのが、至民中学校の学校改革でした。21世紀の未来を託せる若者を育てていくために学校を変えなければいけない。学校を変えるにはまず授業から変えなければいけない。授業改革を中心に学校改革をしていく過程に関わらせてもらうことができました。幸運なことに私は強烈なリーダーシップを発揮される先生方を見て4年間生活をしてくることができました。至民中学校が移転開校することで従来の教育体制とは大きく異なった環境づくりをしていくのを見てくることのできたのです。

滝 民恵 たき たみえ

(福井県立美方高等学校)

本年度4月より、福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースで勉強させていただいている滝民恵です。私は、小学校に3年間、中学校に17年間、20年経てから高等学校勤務となりました。小中学校では新採用の時から担任をさせていただき、「子どもたちや保護者の喜ぶ顔が見たい」という思いで教育活動にあたってきました。30代の時に教科指導員をさせていただく機会に恵まれ、指導主事の先生方とともに小浜市内の小中学校を学校訪問し授業研究会に参加させていただく中で、教科指導や生徒指導について深く学ぶことができました。

現在は美方高等学校で保健部長や生活情報科の主任を務めています。美方高等学校は「明・強・清」の校訓のもと文武両道を建学精神とし、中高一貫教育の推進とともに心豊かな生徒の育成を目指しています。素朴で素直な生徒が多いことや地域に支えられた学校であることもあり、非常にやりがいを持って取り組める学校で、日々とても充実しています。

教職大学院に入学して3ヶ月が経ちましたが、大学院の先生方や他の小・中高等学校の院生の方、若いストレートマスターの方たちと共に語り合い学習する中で大いに刺激を受けることとなりました。特に、合同カンファレンス

このように学校を創っていく過程に参加させてもらっていましたが、自分の理念や考えをしめせないことに力量不足を痛感していました。今までに、学校づくりや子どもを育てていく本当の意味について深く考えてきていなかったから当たり前のことです。そのような時に教職大学院で学んでみないかというお誘いを受けました。自分の力量形成をしていくためにまたとないチャンスを頂くことができました。教育とは何か、どのような実践が生徒に生かせるのか、全くわかっていませんが、自分の今までの実践したことを振り返り、この先の実践を考えていきたいと思っております。

今年度は、学びのサイクルの構築とキャリア教育(Cタイム)についての実践を進めていき、自分自身の学校への関わり方を考えていきたいと思っています。



やラウンドテーブルにおいて他府県の教職大学院の先生方や、学校教育だけでなく医療や福祉など他の分野

で活躍していらっしゃる方々の実践について領域を越えて話し合い聴き合う中で、自分自身のこれからの取り組みについて示唆を与えていただいたように思います。また、教職大学院の先生方とともに京都市立堀川高校へ学校訪問をさせていただき、授業を参観し荒瀬校長先生から学校改革や学校設定科目「探求基礎」について長時間に渡ってお話をお聴きすることができました。学年主任をしていた時に荒瀬校長先生の著書に惹かれ学年通信に記載したその学校へ訪問し、直接お話をお聞きすることができたということに感激しています。その後、福井大学附属中学校や附属特別支援学校の研究会へ参加させていただく中で、もう一度原点に立ち戻って勉強し、美方高校の生徒のためにできるだけのことをしていきたいと誓いを新たにしました。未熟ではありますが、どうぞ、2年間宜しくお願いいたします。

松井 昭男 まつい あきお

(高浜町立青郷小学校)

みなさんこんにちは。わたしは、高浜町立青郷小学校に勤務しています松井昭男です。本校は、福井県の最西端の小学校であり、グラウンドからは、若狭富士と呼ばれる青葉山が見えます。また、学校の前には、高浜町の水源でもある関屋川が流れていて、自然豊かな町です。夏には、関西・中京方面から多くの海水浴客が訪れ、にぎやかな町にもなります。このような所で毎日元気に過ごさせていただいています。

本校の児童は、明るく素直で、思いやりを持って接することができる児童が多いですが、主体性や積極性にやや欠けるところがあって、集団の中で自分の考えや意見を明確にすることが苦手な児童が多いです。そのため、「表現力の育成」に力を入れて研究を進めてきました。一昨年度より、「伝え合う力を高める指導のあり方を求めて」を研究テーマとして取り組んでいます。研究主任を任されて今年度で3年目になります。主任を任された当初は、年輩の先生方に囲まれ、こんな若輩者に研究主任の仕事が務まるのだろうかと思ひ日々でした。研究主任を任されるまでは、先輩の先生方の指導を参考にさせていただきながら、自分なりに精一杯取り組んできました。しかし、研究主任となると、今までとは立場が変わってくるので毎日が慌ただしかったことを覚えています。現在も不安だらけなのですが、ある程度の成果が出せるように、今年度もがんばっていきたいと思っています。

今年度は「伝え合う力を高めるための指導のあり方を求めて」を研究主題とし、サブテーマを「話し合い活動における教師の支援」として取り組んでいます。「子どもの学

びの変化」にスポットを当てることで、研究主題が達成できるのではないかと考えています。「どうしてあの子は、このような考えを持つようになったのか。」「なぜ、あの場面で、そのような発言ができたのか。」といった子どもの学びの変化を見取ることで、教師の支援のあり方が見えてくるのではないかと考えました。

この大学院での学びは、自分の研究に対する思いを先生方に聞いていただいたり、アドバイスをさせていただいたりできるので、本当にありがたいです。また、同じ研究主任としての悩みを聞くことで、「自分だけではないんだ。みんな同じような思いを持っておられるんだ。」という安心感も持つことができました。今回の教職大学院スクールリーダー養成コース入学を機に、研究主任としての力量を高めていきたいと考えていますが、担任をしながら研修を重ねることができるのか、正直不安なところがあります。しかし、大学院の先生方、同じスクールリーダー養成コースの先生方との交流を通して、いろいろな考え方を学び、本校の「伝え合う力を高める指導のあり方を求めて」の研究に役立てていきたいと考えています。福井県の最西端から大学院までかなり距離がありますが、この最西端の地で最先端の確かな理論を学びながら実践を重ねることで研究を進めていきたいと思っています。よろしくお願いします。



布川 洋一 ぬのかわ よういち

(学校法人嶺南学園 敦賀気比高等学校, 同付属中学校)

福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースに入学した布川洋一です。

私が勤務しています敦賀気比高校(通称、気比高)は昭和61年4月に嶺南の地、敦賀に創設された、附属中学校を持つ私立の高校です。私は創立2年目の昭和62年からこの気比高校でお世話になっています。

私が福井大学教職大学院の門を叩かせていただこうと

考えたのは、教員としての職に20年以上ありながら、確固たる信念も自信も持てないまま、ただ闇雲に自己流

で取り組んできた自分自身に対して行き詰まりを感じて



いたときに、教育研究所での長谷川先生のご講演を拝聴し、教職大学院で実践と理論を学ぶことによって、この閉塞感を払拭し、新たな自分自身を見出すことができるのではないかと考えたからです。

教務主任として授業力向上、授業改革を掲げながら自分自身の授業は一体どうなのかと考えたときに、私自身が学ぶ姿勢を持つことの必要性を強く感じたことも理由の一つだと思います。

気比高校では教職員の他校への異動がありません。本校に採用された教職員は基本的に定年退職するまで、本校で勤務をすることになります。これは私立学校の長所でもあり短所でもあると言えるのだと思いますが、短所の一つとしては、他校の先生方との交流が限られた範囲に限定され、視野が狭くなりがちであるということがあげられます。

早川 勇治 はやかわ ゆうじ

(おおい町立名田庄小学校)

こんにちは。今年度、スクールリーダー養成コースに入学した早川勇治です。現在、名田庄小学校在職5年目で、5年担任、研究主任を担当しています。

私は、今年、教員生活23年目ですが、勤務校はなんと2校(辞令としては3校)しかありません。地元の教育委員会で行政の経験はありますが、5年間でなんと派遣スポーツ主事と派遣社会教育主事の2つを経験しています。平成18年3月の合併まで、旧名田庄村(現おおい町名田庄地域)は、一村一保育園一小学校一中学校という環境でしたから、異動が少ないのも理解していただけるでしょう。そして、そんな自分を「井の中の蛙」的であると思っています。

ところで、私の研究主任の経験は意外と古く、平成5年、29歳がデビューでした。その年は、「学習指導の充実」という嶺南教育事務所の研究指定を受けていました。その後、文部省の「豊かな心を育む推進事業」や文部科学省の「人権教育推進事業」の研究指定での研究主任を経験していますので、研究発表会は3度行ったことになります。

一方で「井の中の蛙」的と不安がり、もう一方では、ある程度の実践を行ってきたという自負を持ち、この教職大学院に入学したわけですが、今、自分が確実に変化しています。

教職大学院で校種の異なる先生方の実践をお聴きし、また、自分自身の実践に対してアドバイスをいただく中で、私は自分自身がいかにか「井の中の蛙」であったかということ思い知らされたように思います。先生方の意欲的な実践や、語りの熱さを感じながら、私は本当にこの教職大学院の門を叩いて良かったなと実感しています。もし、ここに入学していなければ、出会うことのなかった諸先生方との出会いは、私にとって何よりも大きな財産であると思っています。

教職大学院への入学に理解を示していただいた学園及び学校長、先輩や同僚である教職員の皆さんに感謝するとともに、私立学校に対しても門戸を開いておられる教職大学院、そして先生方に心より感謝申し上げ、精一杯学んでいきたいと考えています。



実は、私は、人の話を聞いて良いと思ったらとにかく真似をしてみたくなるタイプの人間だと思っています。

さて、4月、5月の合同カンファレンス、6月のラウンドテーブルを経験し、数々の良き実践に心を動かされました。悩みに共感もしました。様々な校種、職種の方の話から、教育の世界は本当に広いことを学びました。そして、「聴く」「語る」ことで、実践を振り返り、反省をし、新しい自分を創り出そうとしていることに気づきました。

その中で、「実践する」ということの方を語った方がいらっしやいました。「実践することがすばらしいことである。実践をとらえ直して語ることも大切である。だから、実践を前に、つまみぐい(人の真似をすること)でも自分で考えても構わない。」という考え方は、自分が考えてきたこと、自分が歩んできたことを応援していただいているようであり、勇気をいただきました。

そして、今、実践に学び、実践をとらえ直そうとしている自分がいます。大学までの2時間半、交通安全を意識して通います。

安井 豊宏 やすい とよひろ

(福井大学教育地域科学部附属小学校)

4月から福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました安井豊宏です。初任校の美山啓明小学校で4年を過ごし、その後、現在の福井大学教育地域科学部附属小学校に赴任し、今年で4年目となります。

前任校の美山啓明小学校では、普段の仕事に加えスポーツ少年団も担当していましたので、毎日のように美山に通ってました。しかし、職員や保護者の方々に温かく接していただき、教師としての仕事以上にたくさん学ぶことができました。

附属小学校では、研究部に所属し低学年を担当しています。本校の研究テーマは「つながり合って育つ」で、今年度はサブテーマに「協働して学びを深める授業をつくる」を掲げました。学校に入ったばかりの子どもたちが協働して学びを深める姿やその姿が見られるような授業の工夫など、他の先生方と語り合い、授業を見合いながら研究しています。

昨年初めて1年生の担任となり、小学校に入ったばかりの子どもたちを相手に四苦八苦の毎日でした。1年生の子どもたちにも分かるよう言葉に気をつけたり、授業中はもちろん、休み時間や給食、下校などの様子を見るようにし



たり、これまで以上に細かい視点を持って子どもたちに接していく大切さを学びました。今年は持ち上りの2年生ということで、子どもたちとも阿吽の呼吸(?)で毎日楽しく有意義に過ごしています。

低学年の子どもたちは、自分の思いを伝える言葉が少なく、話し合いだけでつながるといことはまだまだできません。しかし、言葉は少なくとも活動の中でつながることはできます。その活動の中で友だちと一緒に何かをしたり、新しい発見をしたりして、その喜びを分かち合い温かな関係を築いていき、その子の成長につなげていきたいと考えています。

教職大学院では、大学の先生方や様々な学校の先生方と話し合う機会があり、授業を変えよう、学校を変えようという思いが伝わってきます。どの話も新鮮で学ぶことは多く、この教職大学院で学んだことを、自分の授業実践や教師間の協働にうまくつなげられたらと思います。そして、1年後の自分がどのように成長しているかを楽しみにしながら、今後の研究に励みたいと思います。

多田 昌弘 ただ まさひろ

(越前市味真野小学校)

4月からスクールリーダー養成コースに入学しました多田昌弘です。勤務校は校庭の真ん中に大きな桜の木(エドヒガンザクラ)があることで有名な越前市味真野小学校です。校舎から校庭の桜を眺めると、そのバックには越前富士と呼ばれている「日野山」が四季折々に美しい姿を見せてくれます。このような豊かな自然に囲まれて、味真野の子供たちは元気に素直に育っています。

本校は平成17・18・19年度に「確かな学力育成」の研究指定を受け、1年から4年までは国語、5・6年は算数、そして全学年でより良い生活習慣の定着についての研究を行い、最終年度には研究発表会も行いました。平成18年度に赴任して2年間、数学が専門であることから、5・6年の研究部長として、主に算数の授業研究に取り組みました。そして、4年目となった今年度は、6年担任、研究主任、情報主任を任されています。研究主任は研究発表が終わった平成20年度から、前任の研究主任が異動し



たこともあって任されることとなりました。学校全体を見据えた研究主任としての1年目は、前年度までの取り組みを踏まえた読解力向上と、平成21年度から行われる「英語」の学習について、指導主事訪問での授業研究を柱として校内研究を進めました。しかしながら、多忙化が進み、研究指定というものがなくなったことから、前年度までであった全職員で研究を深めていこうという雰囲気は徐々に影を潜めていってしまいました。研究主任として、この1年間の取り組みは、これで本当によかったのかと反省すると同時に、研究主任というポジションが学校全体に及ぼす影響力というものを感じました。

そんな中で、この教職大学院で学ぶ機会をいただきました。入学にあたり、今まで通り学校での勤務をこなしながら大学院で学ぶこと、また、自分が教職大学院に行くこと

によって、本校の職員に迷惑をかけるのではないかなど、不安も感じていました。しかし、合同カンファレンスやラウンドテーブルなどで、様々な先生方が、熱意を持って取り組んでいる姿に触れ、自分自身の取り組みを見つめ直すことで、自分を成長させる必要性を感じるようになりました。

た。また、大学院の先生方の力をお借りすることによって、本校職員が協働して授業研究等に取り組み、指導力向上という面で貢献できるのではと考えるようになりました。まだ手探りですが、少しずつ成長していけるように2年間がんばっていきたいと思います。よろしくお願いします。

教育改革と教育実践を考えるために

プロセスとしての公共性

ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換』

Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft, 1962

公教育のあり方、そしてその存立理由への問いは、おのずから「公共性」とは何かという問いにつながる。しかし、私たちの共同社会における意志決定の礎であるはずの「公共性」は、それが共通の基盤であるからこそ、個々の専門分野や研究領域をはるかに超えたことがらとなり、これを正面から論じることが難しい。ユルゲン・ハーバーマスの『公共性の構造転換』における歴史的な探究は、ハンナ・アレントやジョン・ロールズとともに、この根本的な問題への問いに手がかりを与えてくれている。ギリシア以降の公的議論の社会史的展開を追い、18世紀後半に明瞭な像を結ぶ「市民的公共性の理念」の思想史的脈絡を探り、20世紀以後の大衆民主主義・世論調査に象徴される段階に至る転換を跡づけ、「公共性」という複合的な主題に問いを進めようとする者にとって、まず検討すべき仕事とすることができるだろう。

ハーバーマスは現代を代表する哲学者・社会学者の一人である。社会科学の基礎づけ、その認識論・方法論をめぐる議論にかかわる『認識と関心』(1968)、そして『コミュニケーション的行為の理論』(1981)によって、社会・歴史・人間にかかわる学を横断する研究を展開し、そのことにより多くの分野に影響を与えてきているが、その関心の中心は、初期の著作『公共性の構造転換』(1962)から、後期の『事実性と妥当性』(1992)に至るまで、一貫して開かれた討議とそこでの省察を介した民主主義の可能性に置かれているととらえることができる。『公共性の構造転換』はその基点となる著作であり、そこにはその後のハーバーマスの研究を方向付ける基本的な論点がすでに明確に示されている。

構成を確認しておこう。序論において、ハーバーマスは世論調査やPR活動といった第二次世界大戦後の民主主義を特徴づけることがらへの言及から問いを起し、公共性にかかわる語(Öffentlichkeit, publicity, publicité)の成立の背景に触れながら、次のように自身の研究の目的を語っている。

「今日われわれが「公共性」という名目でいかにも漠然と一括している複合体をその諸構造において歴史的に理解することができるならば、たんにその概念を社会学的に解明することにとどまらず、われわれ自身の社会をその中心のカテゴリーのひとつから体系的に把握することができると期待してよいであろう。」

1章から2章ではギリシアから中世ヨーロッパ、そして近世における公的コミュニケーションの様態と価値づけの転換が辿られ、3章では17世紀・18世紀のイギリスにおける転換が近代的な公共性に向かう「モデルケース」として検討される。政治新聞の簇生、コーヒーハウスでの市民の議論の展開、政党政治の発展。「政治的に議論する公衆」(p.95)のイギリスにおける形成過程と、その大陸への波及が跡づけられる。

本書の中心に置かれる第4章(「市民的公共性 理念とイデオロギー」)では、ホッブスから、ルソー、カント、そしてヘーゲル、マルクス、さらに19世紀のJ.S.ミルとトクヴィルに至る公共性をめぐる議論・理論の稜線が描き出される。

Jürgen Habermas
Strukturwandel
der Öffentlichkeit

Sammlung
Luchterhand



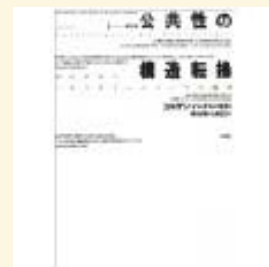
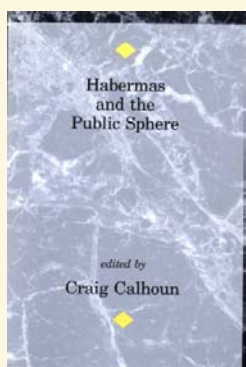
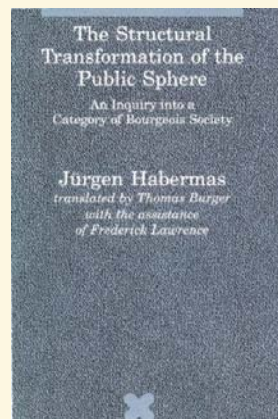
焦点となるのはカントの「啓蒙とは何か」における Öffentlichkeit の概念である。個々人の自立的な思考の実現を主題とするこの論稿は、その条件として個々人の思考の開かれた自由な交流のプロセスとしての公共性 (Öffentlichkeit) を要求しているが、そうした思考する市民による公共性は同時に立法の妥当性を保障する基盤でもある。構成員の自律的な判断とその開かれた交流にもとづく合意こそが、共和制 (民主制) における法の正統性の根拠でもある。個々人の自立的思考 (カントの意味での「啓蒙」) と立法としての政治の双方を媒介し、その発展を保障するものとして開かれた思考の交流プロセスとして、「公共性」は定位されている。

5章から7章にかけてハーバーマスは、19世紀から20世紀なかばまでの展開を通して、「文化を議論する公衆から文化を消費する公衆へ」、「ジャーナリズムからマスメディアによるPRへ」、そして議論としての輿論からアンケートによって集約される「個人的意見の集積」としての世論調査への転換を批判的に跡づけていく(「市民的公共性」から「操作的公共性」へ)

ギリシア的公共性から中世の代表具現的公共性、近世の文芸的公共性から市民的公共性への展開とその思想史的背景、その後19世紀以後の操作的公共性への変質過程を歴史的に辿る構成の中で、第4章の市民的公共性の理念をめぐる検討が、辿られた歴史的稜線の頂点をなしている。展開の稜線をテキストに即して辿りながら、中心的な市民的公共性の理念・理論の構造を再検討することは、それが個々人の思考(そしてその自立的思考にむけての学習プロセス)と、開かれたコミュニケーション、そして共同社会の立法を結ぶ論理であるがゆえに、公教育のあり方とその存立理由に問いを進めようとするものにとっても、避けて通ることのできない、重要な探究のサイクルとなるだろう。

『公共性の構造転換』は、1962年に刊行されているが、細谷貞雄による邦訳がほぼ10年後、1973年に刊行されている(未来社)。

英訳(Thomas Burger, The MIT Press)は1989年に刊行され、公共性をめぐる研究と議論が進むことになる。(Craig Calhoun ed. Habermas and the Public Sphere, The MIT Press, 1991) こうした展開も受けて、ハーバーマスは新しい序文を付した増補版を改めて刊行している。現在入手できるのはこの増補版となる。邦訳は細谷貞雄・山田正之訳で未来社から刊行されている(1994)。(柳沢昌一)



Schedule

8/2 sun - 3 mon 教育のアクションリサーチ研究会(熱海:東京大学主催(任意参加))

8/3 mon -5 wed 夏の集中講座 2a (9:30-17:00)

8/6 thu - 8 sat 夏の集中講座 2b (9:30-17:00)

8/17 mon -19 wed 夏の集中講座 3a (9:30-17:00)

8/20 thu - 22 sat 夏の集中講座 3b (9:30-17:00)

集中講座は1・2・3それぞれabどちらか選択(abの組合せ自由)

9/12 sat 入試ガイダンス(10:00-12:00)

場所:アカデミーホール

9/26 sat 入学者選抜試験(9:00-)

教職大学院 Newsletter No.15

2009.07.30 発行

2009.07.30 印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtkui@yahoo.co.jp

[編集後記] 6/27-28 に行われたラウンドテーブルは、各領域からの提案というスタイルを取り入れました。そこで今回は、ラウンドテーブルに参加した感想を、各領域の方々に書いていただきました。また、前回に引き続き、スクールリーダーコースの院生の紹介を掲載しました。(八田 幸恵)